

京都部落問題 研究資料センター通信

第13号

発行日 2008年10月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告 部落史連続講座

戦国時代の祇園祭

講師 河内将芳さん
(奈良大学准教授)

七月一日に、当センター主催の部落史連続講座第三回目が京都府部落解放センターで開催されました。河内将芳さんの「戦国時代の祇園祭」と題した講演は、興味を持つ方が多く、三十名を超える参加者がありました。講演の要旨は以下の通りです。

戦国時代の祇園祭といえば、第一に梅雨時の夏祭というイメージ、第二には室町幕府に抵抗した町衆の祭というイメージがある。だが戦国時代の祇園祭の有様はどうであったのか、具体的にみていきたいと思う。

まず、祇園祭は二つの祭事によってなりたち、祇園会とよばれていた。二つの祭事とは、平安時代後期から始まっている神輿渡御と、鎌倉時代末期に始まった山鉾巡行である。祇園社には、大宮、八王子、少将井と称される三基の神輿

があり、旧暦の六月七日（新暦七月十四日）に、大宮、八王子の二基は祇園社から大政所御旅所に渡り、少将井は少将井御旅所へ渡った。これを神幸（神輿迎え）という。旧暦六月十四日（新暦七月二十四日）になると、三基の神輿が祇園社へ帰り、これを還幸（祇園会）と称した。ただし、豊臣秀吉の時代になると、二ヶ所の御旅所が一ヶ所にされて、現在の四条寺町の御旅所になった。

山鉾巡行は、七日山鉾（前祭）とあって旧暦六月七日に、応仁の乱前は三十二基、応仁の乱後は二十六基（年により数は異なる）の山鉾が、四条通りから寺町通りを南下して、五条通り（現在の松原通り）へと巡行した。十四日山々（後祭）は旧暦六月十四日に、応仁の乱前は二十八基、応仁の乱後は十基（年により数は異なる）の山が、三条通りから寺町通りを南下して四条通

りへと巡行したものであった。現在は全三十二基が七月十七日に、四条通りから河原町通りを北上して、御池通りを西へ進む道を巡行している。

さて、天文二年（一五三三）の有名な史料「神事これなくとも、山ホコ渡したき（神輿渡御が中止になったとしても、山鉾は渡したい）」を読むと、当時は神輿渡御と山鉾巡行が一体のものとして祭がおこなわれていたことを知る。しかし、式日どおりに祭礼がおこなわれた年や、式日が延引・追行になった年があり、式日は頻繁に変更されているのである。

その原因は、「山訴」（山門「訴訟」とよばれる延暦寺（山門）の大衆による訴訟が頻繁におこり、それともなつて四月の日吉祭（山王祭）、五月の日吉小五月会が延引されたり追行されたりすると、それと密接な関係にある六月の祇園会や八月の北野祭にも影響がおよび、玉突き状態で延引や追行せざるをえないはめになったのである。

だから統計をとってみると、永正三年（一五〇六）から永禄八年（一五六五）の六十年間に二十七回も延引や追行のあったことがわかる。天文二年の神輿渡御がなくて

も山鉾を渡そうとする祭事の有様は、特別なものではなかったといえる。ただし、延暦寺と日吉社が織田信長によって焼き討ちされた元龜二年（一五一七）以降は、祇園社の式日が混乱することはなくなつた。

では、天文二年の祇園祭の実情はどうだったのか、まずは、室町幕府は祇園会を式日どおりおこなわせた強い意向をもっていた。しかし、幕府と延暦寺大衆が対立し、結局、幕府が屈してしまった。町々は準備した山鉾を解体し、また準備するのはむづかしいと、下京の月行事や触口、雑色などが、祇園執行のもとに山鉾を渡したいと言ってきた。そこには、延暦寺大衆に言いたい気持ちがあったのである。

天文二年の祇園祭はどうなったのか、日吉社の祭礼が六月二十四日に追行され、祇園会は八月二十三日におこなわれたのであった。

祇園会を成立させていた諸関係に注目して、あらたな「戦国時代の祇園祭」像が描きだされてきた。

（運営委員 辻三子）

本の紹介

福原宏幸編著

『社会的排除／包摂と社会政策』

杉本 弘幸

（京都市市政史編纂助手）

本書は、「社会的排除／包摂」概念を、積極的に使用した研究を集めた論文集である。構成は以下の通りである。

第一部 社会的排除／包摂論のパースペクティブ

第一章 社会的排除／包摂論の現在と展望（福原宏幸）

第二章 社会理論から見た「排除」

（中村健吾）

第三章 シティズンシップと社会的排除（亀山俊朗）

第四章 イギリスにおける社会的包摂政策とボランティア組織の役割（山口浩平）

第二部 日本における社会的排除の現状と課題

第五章 現代日本の社会的排除の現状（阿部彩）

第六章 日本における無年金、無

保険世帯の実態と課題（吉中季

子）

第七章 ホームレスの人びとに対する居住支援・住居保障（阪東美智子）

第八章 学校教育における排除と不平等（青木紀）

第九章 日本における若者問題と社会的排除（樋口明彦）

補論 日本の経済格差と貧困（阿部彩）

目次のとおり、第一部ではヨーロッパにおける社会的排除／包摂に関する概説・検討が行われ、第二部では「日本における社会的排除の実態を統計的な分析によって明らかにするとともに、社会的排除が深刻化している諸問題を取り上げその実態と政策を明らかにする諸論文」が掲載されている。

では、本書で掲げられている「社会的排除／包摂」論とは一体

どのようなものだろうか。まず社会的排除とは、一九八〇年代に若者の長期失業など、従来の社会保障制度では対応できない集団の存在に直面したフランスに起源をもつ言葉だとされている。これが次第に長期失業層だけでなく、大都市の周辺部やスラムに暮らし、あらゆる面で、通常の機会や制度から切り離された特定集団の問題全体を指すものとして使われるようになった。現在ヨーロッパでは、この用語をEUの新しい社会統合の中心としたために、この概念がいわゆる「貧困」に代わるものとして急速に普及している。

現在、グローバル化による労働市場の再編が、不正規雇用の拡大、外部化や下請け化というかたちで進行している。このような世界市場での競争が、変動をさらに加速させている。また離婚や未婚の増大など家族の変容も指摘されている。こうした変化のもとで、貧富の差の大きな社会へ移行していること。貧困の期間の長い「貧困経験者」の増大が、明らかにされはじめた。この「貧困経験者」の構成では、従来の高年齢層の比率が減り、代わりに若年者、

一人親世帯、移民層の比率が高まっております。これらを「新しい貧困」と呼ぶ人々もいる。社会的排除論は、「新しい貧困」の一部を、社会総体との空間的、制度的位置関係において、捉え直そうとした概念である。つまり、空間的にも、制度的にも「排除」され、周縁に蓄積された「貧困」は、同質の労働者や市民層だけで判断されるものではなく、社会総体の排除と統合の動態的プロセスの中でしか把握されえないことが明らかになってきた。このような人々を一般社会の中に戻していく政策やシステムなどを「社会的包摂」とよんでいる。

かつて、岩田正美はこう述べた。「日本の社会福祉や社会政策の議論において、貧困、貧困地区、ホームレス、外国人労働者などの問題は、『理論・思想』や『システム・制度』、あるいは『高齢者や家族』のような主流ではないけれども、触れておいた方がよいもの、といった程度の扱いでおかれることがよくある。ちょうど、貧困者やその居住地区、ホームレス・外国人等が社会の周縁におかれているのと同様に、貧困や排除の研究それ自

体もとりわけ日本においては周縁化されてきたのである。本書の執筆者による研究打ち合わせの際に、この巻がもしそのような周縁化されたものを、一種のアリバイ証明として、一括して押し込んだようなものであるならば困る、という発言があったことを覚えている。」(岩田正美・西澤晃彦編著『貧困と社会的排除』、ミネルヴァ書房、二〇〇五年、三二二頁)

このような現状から、日本の社会政策／社会福祉学も、ヨーロッパを追いかけるようにして「貧困」から「社会的排除」へと議論を進めつつある。ここでの「社会的排除／包摂」概念は、昨今の様々な社会問題に対する理解に有用であるとともに、これまでも存在していた社会問題解決にも利用できる概念として提示されている。

しかし、本書にも欠けている視点がある。これまでの日本社会で「社会的排除」が行なわれ、包摂が試みられてきたかという歴史的な観点である。

行い、地域社会の都市社会政策による変化を分析した。そして都市社会政策自体が労働運動や水平運動、在日朝鮮人運動などの社会運動の影響や、融和団体、内鮮融和団体への地域社会のリーダー層の参加によって、一九二〇年代に至るまで、政策と運動の相互作用によって政策が変容していくことを指摘してきた。以上のような観点で、都市社会政策の展開を歴史的に通観するために、一九二〇年代の都市社会政策の構造分析を行ってきた。

特に戦後の社会政策／社会福祉を把握するには、戦時期からもちこされた様々な組織のあり方や、行政のシステムが、占領期と高度経済成長という二つのインパクトに、どのように対応しようとしていたのか。また運動を組織したり、社会政策／社会福祉の対象となつた人々が、都市社会政策自体にどのようにアプローチしようとしていたのかはほとんど明らかになっていないのである。つまり戦前・戦時・戦後の連続と断絶のありかたを、理論的・実証的に把握することが重要である。このような視角から、一九二〇年代から現在に

いたるまで通じて分析し、叙述することが可能であろう。

だが、そこで安易な戦時戦後連続論に陥らず、戦時と戦後を統一的に把握するためには、戦時体制が地域社会や都市行政をどのように変え、戦後のありようをどのように準備したかを、高度経済成長を視野にいれながら、展望しなければならぬ。特に戦時期の総力戦体制の構築と、戦後の占領改革という衝撃の中で、戦時期から戦後にかけて何が引き継がれ、何が持ち越されないのでかを重視して明らかにする必要がある。地域社会の様々な運動や、都市行政の変容や構造のありようのせめぎあいを、全体として分析しなければならぬのである。

しかし、現在の所、マイノリティを組込んだ、あるいは主体とした都市社会政策史／社会福祉史研究は、さきあげた幾つかの研究をのぞくとほぼ皆無の状態である。しかし近年、岩田正美「政策と貧困」(『貧困と社会的排除』、ミネルヴァ書房、二〇〇五年)、同「戦後社会福祉の展開と大都市最底辺」(ミネルヴァ書房、一九九五年)、武川正吾「福祉国家と個人化」(『社

会学評論』五四 四、二（四年）によつて、マイノリティの存在を組み込んだ戦後社会政策史研究が提起された。特に岩田正美による「ターゲット型特別政策」の提唱は注目に値する。これは、限られた社会資源を当該マイノリティに集中的投入し、社会的包摂を図るというアプローチである。しかし、この方法のデメリットは、「マジョリティ」からの反発や、政策から洩れる層に新たな社会的排除が創出されることにあるとしている。そして、玉井金五も、戦後社会政策とマイノリティの関係について言及し、いまだマイノリティの位置付けが不十分で、マイノリティの機能と役割に関する究明が必要であると提起し、非常に重大なテーマだと指摘している（同「課題と方法」玉井金五・久本憲夫編著『高度成長の中の社会政策』ミネルヴァ書房、二〇〇四年）。

だが、「戦後日本」を対象とした実証研究は東京の浮浪者、貧困層を対象とした岩田正美、大阪府和泉市の被差別部落を事例とした大西祥恵などが行っている程度である（大西祥恵「マイノリティの労働市場参入についての一考察」『経済学雑誌』一六 四、二（六年など））。また一方で地理学の立場から、水内俊雄などに代表される被差別部落民、在日朝鮮人、日雇労働者、女性などとマイノリティを政策対象別や、特定のマイノリティの居住地域別に分類して分析する手法の研究がある（同「戦後大阪の都市政治における社会的・空間的排除と包摂」『歴史学研究』八七号、二〇〇五年など）。そして、筆者も、これらの研究から学び、いくつかの成果を出している（杉本弘幸「一九四〇年代の都市社会政策と地域住民組織」『歴史学研究』八二四、二〇〇七年、同「一九五〇年代『京都』における失業対策事業・女性失対労働者・被差別部落」『日本史研究』五四七、二〇〇八年など）。今後も様々なマイノリティをこのような動態的な視点で分析していくことが必要だろう。

歴史学研究の立場からも、現代都市社会政策への歴史的連関という観点からも、今後の研究において極めて有意義な書であると考えられる。一読をお勧めしたい。

（シリーズ・新しい社会政策の課題と挑戦第一巻、法律文化社刊、二〇〇七年）

本の紹介

朝治武著

『アジア・太平洋戦争と全国水平社』

手島 一雄

（立命館大学講師）

朝治武氏の第二単著『アジア・太平洋戦争と全国水平社』が上梓された（二〇〇八年八月発行）。四六〇頁におよぶ大著である。第一単著『水平社の原像』（二〇〇二年）が全国水平社の創立期、主として運動の「肯定面」（朝治氏）を探るものであるとすれば、本書は日中戦争以降、水平運動の戦争協力という「否定面」（同）を正面に据え、全水消滅に至る過程を丹念に探究した力作である。

水平運動研究における両時期へのこだわり。この点を朝治氏は、「水平運動が部落解放を目的とした部落民の自主的な活動であるならば、その全体像を明らかにしようと思えば戦時期における水平運動の特質を検討することは避けて通れない重要な課題であろう」（三六一頁）と述べる。また氏は、アジア・太平洋戦争期の水平運動のあり方が、戦後の解放運動にも影響を及ぼしているのではないかと、随所で語っている。

水平運動「全体像」の解明、戦後部落解放運動への影響如何。本書は、そうした朝治氏の、主体的かつ現代的な問題意識が込められた著作でもある。

およそ今日蒐集可能な史料を網羅的に集め、一〇年に及ぶ研究成果をまとめた著作を、この時期の研究を直接手掛けていない筆者が論評することは、もとより至難の業である。まずは、各章で明らかにされたことを筆者なりに紹介し、その上で若干の感想を述べていきたい。最初に、本書の章立てと発表年次を示そう。

序 章 水平運動における戦時的転換の歴史的意味（書き下ろし）
 第一章 戦時期全国水平社と新生運動（一九九九年三月）
 第二章 全国水平社発祥地にお

る戦時動員体制（一九九九年二月）

第三章 戦時期水平運動における

総本部派の位置（二〇〇一年八月）

第四章 全国水平社消滅をめぐる

対抗と分岐（二〇〇七年三月）

第五章 同和奉公会体制における

旧全国水平社関係者の位置（書き

下ろし）

あとがき

序章は、日中戦争勃発（一九三七年七月）を契機とした全国水平社の転換、戦争協力と国家的立場の表明に関して。その「転換の要因」は、一九三〇年代前半における水平運動にすでに孕まれていたと論じる、意欲的な前史研究である。

高松差別裁判闘争後、部落民衆の日常要求に立脚して部落委員会活動を展開した全国水平社は、生活擁護闘争を重視。経済恐慌による部落民衆の生活破綻を救うため、表向きは政府 融和団体に反対しながら、地域においては融和団体と連携し市町村議会にも進出して「地域社会における政治的影響力」を強めることで部落改善費を獲得しようとした。地域秩序はそのま

戦後、水平社幹部が融和団体役員となつて融和事業を進めることに繋がっていくと見る。

一方、糾弾闘争は、反ファシズム人民融和の観点から国民間の対立を惹起せぬようにとの理由で、日常の差別事象に対して「重要な役割を果たさなくなつていった」とする。この時期、全水が行政・経済・教育など「部落差別の基礎」

に対する闘争を重視したのに対し、むしろ融和団体は積極的に差別事件・差別事象の調停に乗り出したという指摘は興味深い。そうした過程を経て、日中戦争後は、全国水平社も「権力の強制力」に期待する調停型の方法で差別事象と向き合うようになったという。また、

権力による共産主義派の弾圧後は、反ファシズムの姿勢は後退し、無産政党や社民勢力との提携も弱まり、やがて国家主義的潮流とも結びついていったとされる。現実主義的な生活擁護闘争と、左派的理

解にもとづく日常的な差別事象闘争の軽視。そうした一九三〇年代前半「水平運動の変容」が、日中戦争における「転換」の前提になつ

ているとの問題提起は重い。

第一章は、日中戦争により戦争協力和国家的立場を表明した全国水平社のその後、一九三八年段階

の状況を詳細に跡づけるものである。その際、従来ほとんど解明されてこなかった、西光万吉・木村京太郎・中村甚哉らによる新生運動の特質、また松本治一郎ら全国水平社幹部と新生運動グループとの接触や攻防が検討される。弾圧で幹部を失つた松本ら全水総本部は、組織的危機を乗り越えるためあえて立場を異にする西光・阪本ら旧幹部の復帰を目論み接触を図る。が、それは同時に、全水解消を唱える新生運動グループからの批判を受ける過程でもあった。

両者の違いについて。国家主義団体・大日本青年党と提携した西光らの新生運動は、水平社宣言の部落民意識を否定し、「皇民」意識に徹することで部落内外の溝が

解消されると考え、全国水平社の解消を第一義とした。一方、松本ら全水幹部は、拳国一致実現の前提として部落差別の解消にこだわ

り、部落民意識を維持したまま、部落の生活擁護や差別觀念の解消に努めようとした。戦時下における部落解放運動の二形態の特質が

析出されていると言つてよい。興味深いのは、全水が新生運動から「利己的」「反国体的」と批判される中で、近衛内閣の「東亜新秩序建設」声明を支持し、融和団体

との提携を強めていく事実である（第一五回大会、一九三八年一月）。いわゆる右からの攻撃が、全水に、自らの立場を明確にすることを促す構図があるのではないか。

第二章は、先の新生運動について、その地域社会における運動の特質を、西光・阪本らの掖上村戦時対策協議会の検討を通して浮き彫りにしたものである。日中戦争

勃発直後に、柏原部落を含む掖上全村の有力者たちで作られた同協議会は、政府や軍部の期待する地域における戦時総動員体制を先駆的に実施していく。応召軍人・家族の慰問や支援、産業組合や報国

貯金、農業労働への学徒動員、兵籍なき男子の報国義勇会、「皇紀二千六百年記念事業」に向けての

地元顕彰活動など。ここでは部落・非部落ではなく、まさしく「皇民」として戦争を地域社会から支えていくことが追求された。

朝治氏は、全体の課題に部落問題を解消していく地域実践が可能であったのは、掖上村にあつて西

光や阪本が「村政において影響力ある与党的展開ができた」前提があつたことだと論じている。新生運動が行われたのは奈良や大阪の一部に限り、地域的広がりを見

せることはできなかった。「皇民」

としての解放という運動は、その社会的基盤として、地域社会における部落の発言力(自立性)を必要としていたことを物語る。

第三章は、全水第一五回大会から、最後の大会となった一六回大会(一九四〇年八月)までの全国水平社の動向を綿密に跡づけるものである。一読して気づくのは、松本ら総本部派と全水解消を唱える部落厚生皇民運動派との対立が、第一章で見た対立の構図と酷似していること。異なるのは、解消派が外部ではなく、他ならぬ全水中央幹部の中から生じている点である。新生運動に近づき全水を離れていた北原泰作に、常任中央委員の朝田善之助・松田喜一・野崎清二らを加えた皇民派は、国民融和の線で部落問題独自の課題を追求する総本部派を「日本国内挙げて東亜新秩序建設聖戦目的貫徹に努力してある現在、…非国民たるの譏りを免れない」と痛烈に批判し全水の解消を求めた。松本ら総本部派は、前四者を除名。一九四〇年に入つて、近衛新体制運動が大きくなつねりとなる中、総本部派は近衛新党支持を表明し、中央融和事業協会と全国水平社の両団体解消による合同路線に転換、全水自

両者のやり取りの分析は詳細を究める。朝治氏は、この合同路線への転換を、実質的に、一九四二年一月の全国水平社消滅に繋がるものと位置づけている。

論述から浮かび上がる歴史像として、全水総本部派の松本らにとつては、先の新生運動との対立が、全国水平社存続を懸けた闘いであつたとすれば、皇民運動派との対決は、部落問題課題の「生き残り」を懸けた争いだったのでないかと筆者は感じた。

第四章は、中央融和事業協会との合体を決めた第一六回大会から、全国水平社が消滅する一九四二年までの流れを、中融、大政翼賛会などとの交渉を綿密に検討することと明らかにしたものである。結論から言えば、全水が目論む両団体の「対等合併」は、水平社をなお敵視する中融会長・平沼騏一郎らの働きで実現されなかった。合併に向け立ち上げられた大和報国運動には、当初、中融幹部らも参加していたが、平沼の「全水は著しい反政府的過去を有する団体であるから合体できない」との反対意見によつて中融が離脱。松本は、以降、有馬頼寧に働きかけ大政翼賛会との提携を強めていこうとする(自らも大政翼賛会福岡県支部の顧問に)。

だが、大政翼賛会そのものが内務省の補助的機関に後退し、興亜運動に重点を置いていく中で、松本は全水が大和報国運動と訣別することを宣言した。この過程で全水総本部派内部にも亀裂が生じていく(井元麟之らは大和報国運動を支持し全水解消の見解に立つ)。

一九四一年六月、厚生省の指導の下、戦時体制に対応する融和団体の一元化を図るとの理由から、中央融和事業協会は同和奉公会に改組された(会長は内務大臣の平沼)。全水幹部は(また皇民運動のメンバーも)地域代表の一員として府県の役員に選出され、そこに吸収された。東条内閣により全国水平社は言論、出版、集会、結社臨時取締法に反する「思想団体」と認定され禁止処分を受けた。従来、解散届けを出さなかった全水を「抵抗」と評価する研究史に対し、朝治氏は、それは局面的な過大評価で、以上に見た全水の「同和奉公会への解消」過程こそ問題にされねばならないと論じた。氏の論稿には、松本らの「部落差別をなくして戦争に勝つ」路線が、「戦争に勝つ(奉公する)」ための組織編成を第一義とする平沼ら政府官僚の路線に抑えられ、吸収されていく経緯が、詳細に描かれていると言えよ

う。

第五章は、同和奉公会体制において、旧全国水平社関係者は何を行っていたのかを明らかにしたものである。旧全水関係者らは、大政翼賛会が積極的に部落問題を取り上げることを訴えたが、大政翼賛会は「部落問題を探り上げると紛擾をきたして自らの組織に支障をきたす」との観点から、同和奉公会を下部組織の翼賛団体とすることは認めなかった。同和奉公会は、「資源調整事業」として満州移民や部落産業再編成(転廃業による軍事産業への徴用)を進めたが、強制的で、その活動は十分な成果を収めることができなかったと朝治氏を見る。氏が注目するのは、旧全水関係者らが、それらの枠に止まらず、部落産業従事者の生活を擁護するため、自主的活動を展開していたという事実である。松本を会長とする犬皮革に関する日本新興革統制株式会社、米田富や松田喜一らによる日本靴修繕業組合連合会、阪本清一郎らの全国和膠工業組合連合会、上田音市を理事長とした三重県伊勢表工業組合など。部落民衆を含む主要都市の屠夫が作った大日本食肉技術員連合会の大会では、屠夫の最低限の基本月給を求める決議がなされた。

また、奈良県磯城郡の梅戸部落では配給米の増配を求めて同盟休校が行われたという。内務省は、これら部落民衆の動きや産業の横断的活動に対して、全国水平社を想起させるものとして警戒を強めた。朝治氏は、同和奉公会は部落民衆への影響力を失い無力化している、右のような旧全水関係者や部落民衆の動きが戦後部落解放運動の再建に繋がったと見る。と同時に、部落解放全国委員会や松本が戦時下の侵略戦争協力について全く不問に付した点については、「全く自覚されなかった」問題（三五八頁）として厳しく批判する。

朝治氏の原著をできるだけだけ内容で紹介したいと思ひ、紙幅を大きく費やしてしまつた。最後に若干の感想や論点を述べて稿を終えたい。

氏は「あとがき」で、「現時点における私の心境は何故か割り切ることができない複雑なものがある」と胸の内を語っている。読み進めた筆者も、同じような感想を持つた。自分なりにその「複雑な思い」を説明すれば、第一章から第四章に描かれたように、部落差別撤廃と部落民衆の生活擁護を追求する幾重もの努力が、同時に、戦争協力とその国家的枠組みに参入していく過程でもあつたことを否応なく思い知らされるためである。しかしそれは、史料に分け入つて事実を総体として描き出した本書の、最大の成果であつたと筆者は考へる。戦時期の運動にも評価点を見出す秋定嘉和氏の研究むしろその問題点に焦点を合わせた藤野豊氏やキムチヨソニ氏の研究があることを承知するが、朝治氏の著作は、両者を包括する戦時下水平運動史像を提起したものであると言えよう。

日中戦争後の転換を考える上で、氏が序章で論じた一九三〇年代前半「転換の要因」は、さらに深められるべき問題群を含んでいると思ふ。特に「一般的には反ファシズムを掲げながら」、実際には地域秩序に依拠する形で生活改善費闘争が進められたり、融和団体と提携して差別事象が処理されていく経過（「糾弾闘争の変容」）に関して。恐慌後の部落の経済破綻、権力による弾圧、左派的な人民融和の観点（「糾弾闘争への懸念」といつた背景にとどまらず、朝治氏が注目する運動論の内実を、さらに掘り下げていく必要があると思ふ。

糾弾闘争については、一九二〇年代から政府のみならず、融和運動からも様々な批判が表されてきた。かつて筆者も取り組んだ三好伊平次などは、部落民としてその心情に共感を示しつつ、実際の糾弾が部落内外の溝をさらに深くすることを懸念して「理解と対話」にもとづく国民啓発の必要性を感じ内務省囑託となつた。また山本正男は、現実の差別事象を解消するには、警察権力を含む官民一体の強力な機構が有効であることを広島県共鳴会の活動で学び、その全国的な組織作りを企図して中央融和事業協会へ参加していった。中融は、部落差別撤廃に関して、そうした軟硬織り混ぜた方法と組織を整備していったと言つてよい。それらに対して、全国水平社は、徹底的糾弾の理論と実践をどのよう深めていったのか。二〇年代後半も含め、全水における糾弾闘争の展開が、改めて問われていると考へる。

部落改善費についても、全水は当初、政府による欺瞞的懐柔策として拒否したが、それらは地域水平社や部落民衆の声をどの程度反映したものだったのか。恐慌までの実際のあるいはないか。三〇年代前半における「反ファシズム」スローガンについては、部落解放論や実際の運動と、どの点で結びつき、また乖離していたのか、全体の解明が必要であると思ふ。

一九三四年四月、全水第一二回大会「大綱」での、「所謂有力者の連中 融和団体の幹部やブルジョア政治家がやつて来た」世話役活動を水平社幹部が担う（六〇頁）という方針については、翻つて、全水創立期研究の論点が想起される。全水創立の意義を地域支配構造の改革と見る鈴木良氏の見解と、部落民意識の高揚（主体形成）を基本と見る朝治氏の見解があり、両者が併存している。「大綱」は、鈴木氏の見方によれば水平運動の転換であり、朝治氏の議論からは部落民衆の生活擁護という点で、むしろ連続的に捉えられるとも言える。

私たちは、全国水平社という大衆組織に対して、今日的な観点から過大な期待を込めて読み込んでいたのかもしれない。氏の戦時期水平運動の分析からは、部落差別解消のために、時々状況下で、あらゆる運動・組織と繋がるようにする姿が読みとれる（それは第五章に象徴的な大衆運動の強さであり、また同時に第四章までに描かれる弱さであろうが）。そうした性格は、水平社創立以来のものであつたのか。創立期と解消期へのこだわりから

水平運動「全体像」の究明が掲げられていただけに、直接言及がほしかったところである。同じく、戦後への影響如何についても、まとまった論説がほしかった。

筆者が大正期の融和運動研究に取り組んできたことから、前の時期に引き付けて議論しすぎたかもしれない。ご寛恕願いたい。全水解消の時期をめくっては、全水の置かれた環境が、当時政局に重要な位置を占めた中央融和事業協会の平沼騏一郎であり、かたや近衛新体制・大政翼賛会に関わった有馬頼寧らであったことに、歴史的な巡り合わせを感じる。一九二〇年代半ばの中融対同愛会という構図、その後の一〇年。それがどのような意味を持つものなのか、いつか自分自身が解いてみたい課題である。

私自身の不勉強もあるが、知らなかった事実が次々と明らかになれ、大変勉強になった。また、様々な課題を思い起こさせてくれる書でもあった。本書は広くフアシズム史研究の分野で読まれるべきものであり、部落史研究者にとつては、専門の時代に拘らず読んでおかねばならない必読の書であると痛感する。

(部落解放・人権研究所刊 二〇〇八年)

資料紹介 松本治一郎記念会館旧蔵資料 松本治一郎関係書簡・資料から 8 本多和明
書評

のびしょうじ『被差別民たちの大阪 近世前期編』 藪田貫 / 福原宏幸編著『社会的排除/包摂と社会政策』 <シリーズ・新しい社会政策の課題と挑戦 第1巻> 内田龍史 / 好井裕明『差別原論 <わたし>のなかの権力とつきあう』 玉井眞理子

部落史研究報告集 12集 (八幡浜部落史研究会刊, 2008.5)

神宮通り子ども会のあゆみ 五藤孝人

幸せになるために 吉森英樹

陽明学と藤樹学 中江藤樹の実像を探る 五藤孝人

史料「幕府法令」「伊予小松藩会所日記(旦那場関係)」

水本正人

部落問題研究 185 (部落問題研究所刊, 2008.6) : 2, 187円

第45回部落問題研究者全国集会報告

歴史1分科会

北関東の長吏小頭と職場・由緒 牧原成征 / 泉州南王子村における村落構造の変化 三田智子

歴史2分科会

近江絹糸人権争議の研究 「社会の深み」から 上野輝将

現状分析・理論分科会

戦後地域社会の変容過程と部落問題解決への道 経済・社会・政治の様式変化を中心として 河野健男 / 戦後社会体制の変化と部落問題解決への過程 現状調査の果たした役割 石倉康次 / 大阪市の同和行政「見直し」の現状と問題点 中山直和

教育分科会

人権教育論の課題 法教育との関連で 北川善英 / グローバル時代の人権とシチズンシップ教育の教材・学習プラン 岸本実

文芸分科会

部落問題文芸研究30年の歩み 部落問題研究所創立60周年に寄せて 川端俊英 / 『橋のない川』の巨大な役割 部落問題解決過程に果たしたもの 秦重雄

PACE 4 (PACE刊, 2008.7)

特集 住むという運動

東九条における新たな住民運動の可能性と課題 北河原建替推進委員会・中野登さんに聞く 山本崇記

水と村の歴史 23号 (信州農村開発史研究所刊, 2008.3)

長野県部落問題関係記事概要 (1912年~1944年) 「朝倉重吉資料」「長野県部落史調査委員会資料」を手がかりに 川向秀武

いわゆる「松本一件」をめぐる 瀧澤英夫

連帯を求めて 朝倉重吉と農民自治会 川向秀武

本当のことをしてください ハンセン病と差別 丸山多嘉男

ライツ 110 (鳥取市人権情報センター刊, 2008.7)

今月のいちおし!! 『暗いところで待ち合わせ』 (乙一著) 田川朋博

立命館経済学 333号 (立命館大学経済学会刊, 2008.5) : 500円

「穢多狩」について 用語としての再検討 畑中敏之

リベラシオン 130 (福岡県人権研究所刊, 2008.6) : 1, 000円

特集 開かれた療養所をめざして

小特集 菊池恵楓園・韓国ソロクト病院訪問記

図書の紹介

『コミュニティ 教育学への招待』 (高田一宏編著) 板山勝樹 / 『国銅』 (帚木蓬生著) 塚本博和 和歌山の部落史編纂会だより 2 (和歌山の部落史編纂会刊, 2008.3)

神野々極楽寺と三昧聖 “お寺”の歴史をみる 坂本亮太

近代の湯峯温泉とハンセン病 矢野治世美

ひょうご部落解放 129 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2008.6) : 700円

特集 マイノリティのための教育 エンパワメントをめざして

コンフリクト(争い)なしには平和・多文化は成り立たない ワークショップを中心に 金敬黙

本の紹介

『西宮現代史』(西宮市刊) / 『七夕しぐれ』(熊谷達也著) / 『満州「被差別部落」移民 あの南天の木はまだあるか』(麻野涼著)

ひょうご部落解放・人権研究所研究紀要 14号 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2008.3) : 1,000円

部落解放教育をめぐるエトスの研究 伊田哲朗, 井上寿美, 齋藤尚志, 笹倉千佳弘, 田中欣和

兵庫県下の義務就学政策と差別 試論 八箇亮仁

地方改良運動下の部落啓発運動 服部一三兵庫県知事の任期時期を中心に 高木伸夫

播磨国姫路高木村の高田家文書(皮革編その2・年貢編・生活編) 安達五男, 上山勝, 兼本雄三, 倉橋昌之, 高木伸夫, 永瀬康博, 藤原豊

部落解放 601号(解放出版社刊, 2008.7) : 1,050円
第34回部落解放文学賞

部落解放 602号(解放出版社刊, 2008.8) : 630円

特集 解放子ども会の挑戦

本の紹介

『「五万日の日延べ」を越えて』(奈良人権・部落解放研究所編刊) / 『非武装のPKO NGO非暴力平和隊の理念と活動』(君島東彦編著) / 『光市事件 弁護団は何を立証したのか』(光市事件弁護団編著) / 『屠場 みる・きく・たべる・かく 食肉センターで働く人びと』(三浦耕吉郎編著) / 『渡来の民と日本文化 歴史の古層から現代を見る』(沖浦和光, 川上隆志著) / 『一人ひとりを大切に教育を』(日教組07人権教育ブックレット編集委員会編)

崩壊深まる自白 狭山第三次再審請求第二補充書から 中北龍太郎

西光万吉作屏風絵「月下美人」、水平社博物館に寄贈される 仲林弘次

移民にも平等な権利を FRANCAを結成して 有道出人 インタビュー・構成 神林毅彦

連続・大量差別はがき事件糾弾闘争の教訓 差別糾弾闘争と法的対応(告訴・裁判) 藤本忠義

「就労実態調査アンケート」から見える兵庫県の被差別部落の就労実態と課題 竹本貞雄

部落文化を訪ねて 6 白装束で神輿を担いだ村 佐渡・佐和田 川元祥一

部落解放 603号(解放出版社刊, 2008.9) : 630円

特集 エイブル・アートの可能性 障害者の自立を考える

本の紹介

『満州「被差別民部落」移民 あの南天の木はまだあるか』(麻野涼著) 朝治武 / 『改訂版 事例・差別表現』(堀田貢得著) / 『部落問題学習の授業ネタ』(部落問題学習ネタつくり会編) / 『フリーターズフリー01号』(フリーターズフリー編) / 『ぼくが世の中に学んだこと』(鎌田慧著) / 『戦争への抵抗力を培うために』(林田英明著) / 『水俣から、未来へ』(熊本日日新聞編)

小さくされてうずくまる人と共に 李仁夏先生を追悼する 東海林勤

ソーシャル・ビジネスで貧困なき世界をつくる バングラデシュ・グラミン銀行の新たな挑戦 境分万純
部落文化を訪ねて 7 共同体労働として 川元祥一
部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 9 第2章 長史・かわたの仕事と役割をめぐる 4 警備・見回りをどう考えるか 藤沢靖介

部落解放 604号(解放出版社刊, 2008.10) : 630円

特集 死刑廃止論 存置と廃止の壁を越えて

本の紹介

『心を沈めて耳を澄ます』(鎌田慧著) / 『甲山事件 えん罪のつくられ方』(上野勝・山田悦子編著) / 『いつか春が 父が逮捕された「佐賀市農協背任事件」』(副島健一郎著) / 『花まんま』(朱川湊人著) / 『CRSと人権 雇用・職業を中心に』(竹村毅著) / 『命ひとつもろた』(多田恵美子著)

「近代文明」のあり方から差別をとらえる ひろたまさき『差別からみる日本の歴史』を読む 黒川みどり

「華僑肅清」から見える日本軍の体質 山本宗補
視覚的資料の重要性 『ビジュアル部落史』の発刊に寄せて 原田雅秀

部落文化を訪ねて 8 日本近代医学の母 川元祥一

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 10 補論 「賤民」の專業と旦那場 藤沢靖介

部落解放研究 182号(部落解放・人権研究所刊, 2008.7) : 1,000円

特集 大阪の教育保護者組織

教育保護者組織とは何か 高田一宏 / 大阪の教育保護者組織の現状と課題 中村清二 / 「当事者」がみた教育保護者組織の役割 木村和美

同和教育の理念と教訓を重ねて、人権教育の創造を 文科省「第三次とりまとめ」を読み、活かすために 高松秀憲

実態調査結果を地域で学びあい課題を共有化する取り組み 「2002年度善法地区生活実態調査結果について」の学習会をとおして 竹口等

合衆国におけるコミュニティ・スクーリングの現状 1

ハヤシザキ カズヒコ/レイチェル・ウィンター

『改進黨の歴史其の十九』解放新聞改進黨版(2008年2月20日付)への反論 7 川部昇
 地域と人権京都 531号(京都地域人権運動連合会刊, 2008.8.15):150円

『改進黨の歴史其の十九』解放新聞改進黨版(2008年2月20日付)への反論 8 川部昇
 地域と人権京都 532号(京都地域人権運動連合会刊, 2008.9.1):150円

『改進黨の歴史其の十九』解放新聞改進黨版(2008年2月20日付)への反論 9 川部昇
 地域と人権京都 533号(京都地域人権運動連合会刊, 2008.9.15):150円

『改進黨の歴史其の十九』解放新聞改進黨版(2008年2月20日付)への反論 10 川部昇
 映画は貧困問題とどう向き合ってきたか 1 山田和夫
 ちくま 435~448号(筑摩書房刊, 2007.6~2008.7)
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 1~14 沖浦和光
 であい 555(全国同和教育研究協議会編, 2008.6):150円

人権文化を拓く 133 人権問題と「事業者としての行政」の責任と役割 柏木宏
 であい 556(全国同和教育研究協議会編, 2008.7):150円

人権文化を拓く 134 「日本の縮図」釜ヶ崎から 生田武志
 であい 557(全国同和教育研究協議会刊, 2008.8):150円

人権のまちをゆく 42 羽曳野市向野
 人権文化を拓く 135 先住民族アイヌ 長谷川修
 どの子も伸びる 393(部落問題研究所刊, 2008.8):735円

「人権教育」批判 『人権教育の指導方法の在り方について「第三次とりまとめ」(案)』について その2 谷口幸男
 どの子も伸びる 394(部落問題研究所刊, 2008.9):735円

「人権教育」批判 改訂された日教組「人権教育指針」(その1) 谷口幸男
 奈良県立同和問題研究史料センター研究紀要 14号(奈良県立同和問題研究史料センター刊, 2008.3)

明治期被差別部落知識人の交流圏 中尾靖軒の人脈をめぐって 奥本武裕
 部落問題の語られ方 大正期の部落観についての一試論 井岡康時
 近世夙村の生成に関する一試論 伊賀国名張郡狭田村を素材に 吉田栄治郎
 「三棟」考 中世大和の被差別民集団三党の考察 山村雅史

アフリカにおける差別問題 松田素二
 ねっとわーく京都 235(ねっとわーく京都21刊, 2008.8):500円

特集 地デジ・同和・立命館 分かっているようでよく分からない三題噺
 「すべて市を助けるためにやったこと」 解放同盟支部長の言い分 錦林地区職務強要事件後日譚 寺園敦史
 ウオッチャーレポート 50 「1年以内に不祥事根絶」門川市長の公約は実現できるのか 岡根竜介
 ねっとわーく京都 236(ねっとわーく京都21刊, 2008.9):500円

同和レポート 泥沼、より深みへ 同和行政総点検委員会の逆走 寺園敦史
 ねっとわーく京都 237(ねっとわーく京都21刊, 2008.10):500円

ウオッチャーレポート 52 無責任行政のツケは市民に 同和行政総点検委員会「中間報告」について 寺園敦史
 はらっぱ 286(子ども情報研究センター刊, 2008.7)

特集 「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」の改定 現場の声をきく
 はらっぱ 288(子ども情報研究センター刊, 2008.9)

特集 「家庭教育」ってなに? 1 家庭教育雑誌からなにが見える?
 ヒューマンJournal 185号(自由同和会中央本部刊, 2008.6):500円

融和運動の再評価 1 解放と改善 宮崎学
 ヒューマンライツ 244(部落解放・人権研究所刊, 2008.7):525円

走りながら考える 87 大阪府は「破産企業」ではない 人材悪化スパイラルを防げ 北口末広
 報告 大阪府の財政再建を口実とした図書館・博物館の存続の危機に立ち上がる 本多和明
 橋下徹大阪府知事による予算案に対する部落解放・人権研究所の見解 寺木伸明

シリーズいっしょに動こう、語りあおう 9 「進路保障」という古くて新しい問題 笹倉千佳弘
 書評 項陽著・好並隆司訳『楽戸 中国・伝統音楽文化の担い手』 小笠原正仁
 ヒューマンライツ 245(部落解放・人権研究所刊, 2008.8):525円

走りながら考える 88 部落解放運動をとりまく情勢を考える 正確な現状認識が切り開く 北口末広
 ジェンダーで考える教育の現在 19 レイブと社会のセーフティネット 山中はるな
 ヒューマンライツ 246(部落解放・人権研究所刊, 2008.9):525円

部落解放・人権研究所40年の歩み 1 台所からのスタート 友永健三

ナリズムと反復する植民地主義』 洪宗郁

人権と部落問題 775 (部落問題研究所刊, 2008.7) : 630円

特集 福岡県・小西裁判で問われたもの

「その時 歴史が動いた『全国水平社結成』」(NHKテレビ4月16日放映)を見て 成澤榮壽

本棚 尾川昌法著『人権のはじまり 近代日本の人権思想』 大森実

文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民 『駿台雑話』より 小原亨

「解同」裁判40年 到達点と課題 7 八鹿・朝来事件(下) 刑事判決を批判し、見識を示した民事判決など 石川元也

人権と部落問題 776 (部落問題研究所, 2008.8) : 630円

特集 人権教育の新たな段階

文芸の散歩道 新体詩作品『猿曳』に見られる島崎藤村の表現方法の原型 桑原律

「解同」裁判40年 到達点と課題 8 大阪浪速「窓口一本化」事件 行政の主体性、公平性、直接判断権を明確にした高裁判決 石川元也

人権と部落問題 777 (部落問題研究所刊, 2008.9) : 630円

特集 子どもの人権と新学習指導要領

滋賀県同和問題研究所の果たした役割とこれからのこと 山田稔

文芸の散歩道 カール・秋谷一郎著『サム、ちょうという男』 少年が見た神戸湊川の米騒動 秦重雄

「解同」裁判40年 到達点と課題 裁判闘争の前進と政府の施策の大転換 地対協意見具申、啓発推進指針と法務省通知等の意義 石川元也

人権と部落問題 778 (部落問題研究所刊, 2008.9) : 1,155円

特集 同和行政の終結と地方自治

滋賀・近江八幡市 終結を求める13年の運動実る 小川廣司/長野・御代田町 事業の「完全廃止」を宣言 茂木祐司/大阪府 橋下知事の「大阪維新プログラム案」でどこへ向かおうとしているのか 山崎義郷/大阪市 平松市政で、どう変化したか 成瀬明彦/芦原病院問題の真相と責任 伊賀興一/京都市 市長選挙で、不祥事・同和行政は変わったか 井坂博文/和歌山県 異常な「高度化資金貸付金」問題 松坂英樹

2007年度部落問題研究所定期誌総目次 「人権と部落問題」「部落問題研究」「どの子も伸びる」

季刊人権問題 352 (兵庫人権問題研究所刊, 2008.7) : 735円

兵庫における民主主義と人権に生涯を捧げた人々 1 部落問題の正しい解決を願って生涯奮闘した藤末均さん

前田武

振興会通信 88号(同和教育振興会刊, 2008.5)

同朋運動史の窓 4 左右田昌幸

世界人権問題研究センター研究紀要 13号(世界人権問題研究センター刊, 2008.3)

韓国における移住労働者の法的地位と人権 「雇用許可制度」を中心に 金東勲

犯罪人引渡に関するヨーロッパ人権裁判所の判例法の展開 「テロとの戦い」の下での犯罪人引渡と人権 北村泰三

近世期説教者と組織編成 斉藤利彦

近世京都惣検校職屋敷の構造 梅田千尋

在日ブラジル学校の現状からみる課題 リリアン テルミハタノ

《マンガ嫌韓流》におけるマンガ表現の技法とその限界 作品の「読み」の側面に着目して 福本拓

戦前期における被差別部落の状況と在日朝鮮人 京都市崇仁地区を事例に 高野昭雄

女性差別撤廃条約三〇年の軌跡 山下泰子

経済連携協定と外国人看護師・介護福祉士の受け入れ

政策決定プロセスと制度の問題点 安里和晃

中世の坐態からみた衣と住 肖像画・風俗画・故実書を素材として 田端泰子

京都における朝鮮人学校閉鎖期(1948~1950)の状況 府・市による閉鎖措置と公立学校への転校の視点から 松下佳弘

The Status in China of Human Rights Treaties Gong Renren

総合資料館だより 156(京都府立総合資料館刊, 2008.7)

古文書つれづれ35 山城の触の回達ルート 方切、郡切 山田洋一

月刊地域と人権 294(全国地域人権運動総連合刊, 2008.7) : 350円

「映画は貧困問題とどう向き合ってきたか」 山田和夫

月刊地域と人権 295(全国地域人権運動総連合刊, 2008.8) : 350円

特集 全国人権連第3回定期大会

地域と人権京都 528号(京都地域人権運動連合会刊, 2008.7.1) : 150円

『改進黨地区の歴史其の十九』解放新聞改進黨版(2008年2月20日付)への反論 5 川部昇

地域と人権京都 529号(京都地域人権運動連合会刊, 2008.7.15) : 150円

『改進黨地区の歴史其の十九』解放新聞改進黨版(2008年2月20日付)への反論 6 川部昇

地域と人権京都 530号(京都地域人権運動連合会刊, 2008.8) : 150円

- を引き継いで 石田重幸 / 出会いは人を変える、人は出
 会いで変わる 中山泰一 / 部落問題のこれから... 奥田
 均 / 部落史へのご招待 西村芳将
 人権学習の「学び」を考える 「おとなの学び」再考
 日野玲子
 語る・かたる・トーク 160 (横浜国際人権センター刊、
 2008.6) : 500円
 わたしと部落とハンセン病 33 林力
 信州の近世部落の人びと 37 一把稲と旦那場 9 斎藤洋
 一
 同和問題再考 90 「地名総鑑事件」の発端 田村正男
 部落差別の現実 71 新しい動き1 差別解消の責任 江
 嶋修作
 語る・かたる・トーク 161 (横浜国際人権センター刊、
 2008.7) : 500円
 わたしと部落とハンセン病 34 林力
 信州の近世部落の人びと 38 一把稲と旦那場 10 斎藤洋
 一
 同和問題再考 91 うろたえた購入企業 田村正男
 部落差別の現実 72 新しい動き 2 江嶋修作
 語る・かたる・トーク 162 (横浜国際人権センター刊、
 2008.8) : 500円
 わたしと部落とハンセン病 35 林力
 信州の近世部落の人びと 39 一把稲と旦那場 11 斎藤洋
 一
 同和問題再考 92 購入企業、同企連結成へ 田村正男
 部落差別の現実 73 新しい動き3 江嶋修作
 語る・かたる・トーク 163 (横浜国際人権センター刊、
 2008.9) : 500円
 わたしと部落とハンセン病 36 林力
 信州の近世部落の人びと 40 一把稲と旦那場 12 斎藤洋
 一
 同和問題再考 93 結成前から具体的活動 田村正男
 部落差別の現実 74 精神しょうがい者の人権 2 江嶋修
 作
 カトリック部落差別人権委員会ニュース 117 (カト
 リック部落差別人権委員会刊、2008.9)
 講演 部落問題からハンセン病問題への差別の連鎖 藤野
 豊
 かわとはきもの 144 (東京都立皮革技術センター台東
 支所刊、2008.6)
 靴の歴史散歩 89 稲川實
 正倉院と皮革 9 鞍褥は燻し革か、史学者は肯定論を展
 開 皮革技術上の課題ともいえる燻し技術 出口公長
 皮革関連統計資料
 かわとはきもの博物館めぐり 1 かわとはきものギャラ
 リー 福原一郎
 京都市政史編さん通信 32号 (京都市市政史編さん委
 員会刊、2008.8)
 日露戦争前後における浜岡光哲の動向 下 福家崇洋
 グループ 54 (世界人権問題研究センター刊、2008.7)
 「日常」を揺さぶる 大学における教職課程科目として
 の「人権教育」 廣岡浄進
 京都における外国籍市民の現在 「京都市外国籍市民意
 識・実態調査」から 2 小川伸彦
 「被害当事者には回復する力がある」 井上摩耶子
 「障害者役割」という窓から 松波めぐみ
 こべる 185 (こべる刊行会刊、2008.8) : 300円
 ひろば 118 沖縄へ 「ルーツを探る旅」をつづけて 沼
 尾実
 横浜・寿識字学校から 12 石川一雄さんのこと 大沢敏
 郎
 光る風を見た 写真と文 小林茂
 こべる 186 (こべる刊行会刊、2008.9) : 300円
 部落のいまを考える 106 「人権のプロ」の虚像と実像
 福岡ともみ
 差別・被差別 混沌の泉 2 一枚の記念写真 山口公博
 ある光景 23 差異へのまなざし 重信陽子
 いのちを生きる 13 めぐりあえた二本の映画 長谷川洋
 子
 こべる 187 (こべる刊行会刊、2008.10) : 300円
 対談：日本の近現代思想と人権 1 「人間と差別」をめ
 ぐる体験と思索から 鹿野政直+藤田敬一
 ひろば 119 特別支援教育について考える 原田琢也
 いのちを生きる 14 うれしい知らせ 長谷川洋子
 光る風を見た 写真と文 小林茂
 コリアNGOセンターNews Letter 17 (コリアNGOセン
 ター刊、2008.7)
 書籍紹介 『裁判の中の在日コリアン～中高生の戦後史
 理解のために～』 (在日コリアン弁護士協会編著)
 試行社通信 261号 ([八木晃介刊] , 2008.7)
 差別とは何であるか 差別とは何でないか
 しこく部落史 10号 (四国部落史研究協議会刊、2008.
 7)
 シンポジウム 旦那場・勸進場について
 皮多集落と旦那場 井澤武大 / 旦那場の成立は幕藩体制
 以前に遡る 伊予小松藩会所日記を通して 水本正人
 / 箱廻し芸人と旦那場の諸相 出雲街道・伊那谷にみる
 箱廻しのあしあとから 辻本一英
 「郷株」覚え書 宇賀平
 愛媛の融和運動 水本正人
 史料紹介 丸亀藩領の旦那場史料 浜近仁史
 徳島の融和運動 増田智一
 社会科学 81 (同志社大学人文科学研究所刊、2008.7) :
 1,000円
 書評 趙寛子 『植民地朝鮮 / 帝国日本の文化連環 ナシヨ

- 解放の文学 28 過酷労働に一抹の希望 小林多喜二と『蟹工船』 音谷健郎
 今週の1冊 『戦争絶滅へ、人間復活へ 93歳・ジャーナリストの発言』（むのたけじ著）
 解放新聞 2383号（2008.8.18）：80円
 今週の1冊 『甲山事件えん罪のつくられ方』（上野勝・山田悦子編著）
 解放新聞 2384号（2008.8.25）：80円
 『五街道分間延絵図』の解説篇補遺を発行
 山口公博が読む今月の本
 『サラン・故郷忘じたく候』（荒山徹著）/ 『「難死」の思想』（小田実著）/ 『反貧困 「すべり台社会」からの脱出』（湯浅誠著）
 解放新聞 2385号（解放新聞社刊，2008.9.1）：120円
 東京・差別ホームページとの闘いから
 多様な教育を求めて 不登校から学ぶ 不登校とは何か・不登校問題の整理 奥地圭子
 ぶらくを読む 37 創造財としての「労働」 消費財としての「労働」 湧水野亮輔
 解放新聞 2387号（解放新聞社刊，2008.9.15）：80円
 解放の文学 29 文学を覆う時代の力 井上光晴と『ガダルカナル戦詩集』 音谷健郎
 今週の1冊 『新・環境学 現代の科学技術批判 3』（市川定夫著）
 解放新聞 2388号（解放新聞社刊，2008.9.22）：80円
 今週の1冊 『世界を変える人たち 社会起業家たちの勇気とアイデアの力』（デビッド・ボーンステイン著）
 山口公博が読む今月の本
 『水平社宣言を読む』（住井すゑ・福田雅子著）/ 『私の生まれた日』（井上ハツミ著）/ 『一条の光』（耕治人著）
 解放新聞大阪版 1748号（解放新聞社大阪支局刊，2008.9.8）：70円
 セクハラ対策委を結成 再発防止へ全支部あげて
 部落解放同盟大阪府連合会セクシュアル・ハラスメント等の防止等に関する要綱
 解放新聞改進黨 375号（部落解放同盟改進黨支部刊，2008.7）
 部落解放運動を取り巻く今日的課題と方向 野口峯吉
 ABC放送「ムーブ！」について 前編 柳生雅巳
 傍聴記 第1回自立促進援助金制度の見直しに係る法的課題整理等研究会，第3回京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会
 唄い継ぐところ～私の中の「竹田の子守唄」～ 4 奥村キミ子さん 上
 改進黨地区の歴史 其の23 同和行政縮小の波 2
 解放新聞改進黨 376号（部落解放同盟改進黨支部刊，2008.8.20）
 ABC放送「ムーブ！」について 後編 柳生雅巳
 傍聴記 京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会
 唄い継ぐところ～私の中の「竹田の子守唄」～ 4 奥村キミ子さん 中
 改進黨地区の歴史 其の24
 解放新聞改進黨 377号（部落解放同盟改進黨支部刊，2008.9）
 京都市協と村山祥栄前市会議員との話し合いが行われる
 傍聴記 京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会
 唄い継ぐところ～私の中の「竹田の子守唄」～ 4 奥村キミ子さん 下
 解放新聞京都市版 201号（部落解放同盟京都市協議会刊，2008.7）：100円
 自立促進援助金について
 解放新聞京都市版 202号（部落解放同盟京都市協議会刊，2008.8）：100円
 自立促進援助金制度について
 解放新聞京都市版 203号（部落解放同盟京都市協議会刊，2008.9）：100円
 村山祥栄さんと意見交換会
 解放新聞奈良県連版 866号（解放新聞社奈良支局刊，2008.6.25）：50円
 北山の清目 2 光明皇后伝説 松田好則
 解放新聞奈良県連版 867号（解放新聞社奈良支局刊，2008.7.10）：50円
 北山の清目 3 児乃手柏と奈良豆比古神社 松田好則
 解放新聞奈良県連版 868号（解放新聞社奈良支局刊，2008.7.25）：50円
 北山の清目 4 触らぬ神に祟りなし 松田好則
 解放新聞奈良県連版 870号（部落解放新聞社奈良支局刊，2008.8.25）：50円
 北山の清目 5 神木動座と神人 松田好則
 解放新聞奈良県連版 871号（解放新聞社奈良支局刊，2008.9.10）：50円
 北山の清目 6 北山十八間戸 松田好則
 解放新聞広島支局 1930号（解放新聞社広島支局刊，2008.9.5）
 講演要旨 これからの部落解放運動 下 小森龍邦
 解放へのはばたき 84（日本基督教団部落解放センター運営委員会刊，2008.8）
 特集 今ある差別
 読書案内 『世界屠畜紀行』（内澤句子著）岡本拓也 架橋 19号（鳥取市人権情報センター刊，2008.9）
 特集 部落問題のこれから、熱と光を求めて
 水平社宣言との出会い 金泰九/自分を問うこと 人から学ぶこと 中山咲貴/保護者会活動と私 先輩たちの思い

収集逐次刊行物目次 (2008年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

あい・ゆーKYOTO 31 (京都市人権文化推進課刊, 2008.8)

特集 発達障害の人たちに正しい理解と支援を
ウィングスきょうと 87号 (京都市女性協会刊, 2008.8)

図書情報室新刊案内

『女性と美の比較文化』(鳥越成代著) / 『母が重くてたまらない～墓守娘の嘆き～』(信田さよ子著)

岡山部落解放研究所報 285号 (岡山部落解放研究所刊, 2008.9) : 100円

岡山部落解放研究所 社団法人として新たに出発

解放教育 489 (解放教育研究所編, 2008.8) : 760円

特集 若手教師の実践ステップ・アップ術

元気のもととはつながる仲間 41 「馬角斎印」と押した人物 教材化すべき先人の生き方とは 外川正明

解放教育 490 (解放教育研究所編, 2008.9) : 760円

特集 綴る子ども・表現する子どもを育てる

元気のもととはつながる仲間 42 いちばん最初に知らせようと思って 外川正明

解放教育 491 (解放教育研究所編, 2008.10) : 760円

特集 先住民族としてのアイヌをめぐる教育課題

元気のもととはつながる仲間 43 やっぱり、故郷で恩返し
がしたいから 非正規雇用にささえられた学校教育 外川正明

書評 『ビジュアル部落史』全5巻 (大阪人権博物館編刊)

読む部落史から見る部落史へ 中尾健次

問題解決学習とシステム学習を再考する～ソーシャルワークを参考に～ 森実

解放新聞 2376号 (解放新聞社刊, 2008.6.30) : 80円

今週の1冊 『危険な食品・安全な食べ方』(天笠啓祐著)

山口公博が読む今月の本

『伊勢神宮の衣食住』(矢野憲一著) / 『松本清張への召集令状』(森史朗著) / 『流行り唄五十年』(添田知道著)

解放新聞 2377号 (解放新聞社刊, 2008.7.7) : 120円
多様な教育を求めて 不登校から学ぶ 4 不登校の歴史を
変える子どもたち 奥地圭子

ぶらくを読む 35 部落が発信する技術・文化としての太鼓 湧水野亮輔

今週の1冊 『崖っぷちに立つあなたへ』(落合恵子著)

解放新聞 2378号 (解放新聞社刊, 2008.7.14) : 80円

島団地再生への道 和歌山 1

解放の文学 27 原爆文学に被爆2世の眼 青来有一と『爆心』 音谷健郎

解放新聞 2379号 (解放新聞社刊, 2008.7.21) : 80円

島団地再生への道 和歌山 2

今週の1冊 『姜尚中の青春読書ノート』(姜尚中著)

解放新聞 2380号 (解放新聞社刊, 2008.7.28) : 80円

島団地再生への道 和歌山 3

今週の1冊 『官製ワーキングプア』(布施哲也著)

山口公博が読む今月の本

『港区ではベンツがカローラの6倍売れている～データで語る格差社会』(清水草一著) / 『ぼくが世の中に学んだこと』(鎌田慧著) / 『北のはてのイービク』(ピーパルク・フロイゲン作)

解放新聞 2381号 (解放新聞社刊, 2008.8.4) : 120円

講演要約 ハンセン病と部落問題そして宗教者 藤野豊

多様な教育を求めて 不登校から学ぶ 5 在宅不登校支援「ホームシュール」の活動 矢嶋康平

ぶらくを読む 36 階層社会のなかの教育の課題 2 湧水野亮輔

解放新聞 2382号 (2008.8.11) : 80円

事務局よりお知らせ

10年前に大学進学達成について聞き取り調査を行った若者たちに、その後の進路・結婚について再度聞き取り調査を実施し、分析した『被差別部落の大学卒業者の進路と結婚 転換期における追跡聞き取り調査を通して』ができました。著者は京都文教大学の竹口等さん、京都教育大学の伊藤悦子さん・外川正明さんです。販売は当資料センターが行います。購入ご希望の方は電話・FAX・メール(qm8m-ndmt@asahi-net.or.jp)等でご連絡ください。価格は送料込みで500円です。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分